

臨床心理士養成大学院における学外実習の現状について

－医療領域のアウトリーチの視点から課題を探る－

鹿児島純心女子大学大学院

仲 沙 織

和文要旨

近年、専門家による心のケアが広く必要とされており、心理職にとっては新しい職域である医療領域のアウトリーチへの需要が高まりつつある。本研究では、特に医療領域でのアウトリーチに視点を置き、現在の指定大学院における医療領域の学外実習の現状を明らかにし、課題を探ることを目的として文献研究を行った。学内実習についての報告や調査研究と比較して、学外実習についての論文は希少であり、本研究では10文献を対象として検討を進めた。全国的な指定校の調査では、教育領域での学外実習の充実に対して、医療領域での学外実習が少ないことが明らかとなっている。実習生を対象とした調査からは、修了後に最も役に立つ体験として学外実習が挙げられ、実習生が学びと成長を得る体験は、心理職養成のプログラムには欠かせないと考えられる。精神科のみならず小児科やリハビリテーションの現場など、多様な学びを目指し実習プログラムが組まれていたが、アウトリーチに言及した論文は見当たらなかった。今後地域移行が進むにつれて、アウトリーチ型の支援の重要性は高まることが予想され、心理職の国家資格化を受け、心理職の職域もアウトリーチへ展開していく可能性が高く、多職種チームの中で協働できるスキルが求められている。実習は、理論と実践をつなぐ架け橋となる。医療領域における実習の充実に加え、多職種協働およびアウトリーチにおける心理臨床の理解と体験の場の確保を目指した実習プログラムの構築が求められるのではないかと考察された。

キーワード：臨床心理実習 臨床心理的地域援助 アウトリーチ 多職種協働

I 問題と目的

1988年に臨床心理士の資格認定がスタートして以降増加の一途をたどり、平成29年4月1日現在で32,914名が認定されている。臨床心理士の資格を取得するためには、臨床心理士養成指定大学院（以下、指定大学院と表記）で修学し、臨床心理士試験の受験資格を得る必要がある。臨床心理士の指定大学院は、2016年11月現在で、専門職大学院が6校、第一種指定大学院と第二種指定大学院は併せて165校となっている。また、専門家による心のケアが広く必要とされている社会的背景を受け、2015年9月に「公認心理師法」が可決・成立し、心理職の国家資格化が現実となった。臨床心理士は、社会のニーズに応え、その専門性やアイデンティティを再度確立し、公認心理師と共に、社会に貢献し得る存在となるべく日々の臨

床や研究により一層励む必要があると考える。そのためには、指定大学院における臨床心理士養成のプログラムを今一度見直し、課題を精査し、新たな育成プログラムを模索する必要があるのではないだろうか。

（公）日本臨床心理士資格認定協会（2016）によると、臨床心理士に求められる固有の専門業務は、1.臨床心理査定、2.臨床心理面接、3.臨床心理的地域援助、4.これら1～3に関する調査・研究・発表の4つであり、指定大学院や専門職大学院の必修科目に該当する特論に位置づけられている。指定大学院では、これらの専門性を持った人材を育成すべく、講義や学内、学外での実習プログラムを提供している。近年、心理職の活躍の場として、近年アウトリーチに注目が集まっている。臨床心理士の専門業務の3つ目に挙げられている臨

床心理的地域援助とは、特定の個人を対象とするのではなく、地域や学校、職場に所属する人びとの心の健康を援助するといった、予防医学へ注目した公衆衛生活動を指し、アウトリーチへ参入する際、特に身に付けておきたいスキルであろう。我が国の多職種によるアウトリーチは、米国で開始された包括型地域生活支援プログラム (Assertive Community Treatment : 以下、ACTと略記) から大きく影響を受けている。ACTとは、心理職を含めた多職種専門家チームが、365日24時間体制で、重度精神障害者への訪問支援を行うものであり、我が国でも、2003年に千葉県市川市においてACT-Jがモデル事業として開始され、チームスタッフ基準に、必須ではないものの心理職が明記された。また、厚生労働省は、2011年4月に「精神障害者アウトリーチ推進事業」を開始し、チーム構成の中に「臨床心理技術者 (臨床心理士等)」と、国家資格ではない臨床心理士を明記した。アウトリーチにおいて心理職が求められていることがうかがえる。しかし、医師、看護師、作業療法士、精神保健福祉士等の多職種チームへ、心理職の参入は進んでいない現状がある。筆者は、ACTスタッフに半構造化面接または質問紙調査を実施し、心理職のチーム参入が求められていることを明らかにした (仲, 2015, 2016a)。また、サービスを受ける側の利用者へニーズ調査を実施した結果、日常生活支援や服薬管理など、様々な支援の中で群を抜いて“話しを聴いてほしい”というニーズが最も高いことが明らかとなり (仲, 2016b)、精神科アウトリーチの中に、臨床心理士の傾聴スキルを活かした役割があるのではないかと考えた。

では、指定大学院において、新しい領域であるアウトリーチはどのように教育・指導されているのだろうか。一般社団法人日本臨床心理士会 (編) (2009) は、「臨床心理士の大学院指定校制度により、臨床心理士の基礎的な教育・訓練システムの整備は一定の効果を上げているといえる。しかし、実際に種々の臨床現場で必要とされる技量や

資質の醸成には、大学院における教育だけでは充分とはいえないのが現実である」、と報告し、さらに、臨床心理的地域援助について、新人研修では、「地域・組織援助／臨床心理士の活動が『面接室の中』だけで済むという誤解を生まないために、いろいろな組織や部署をコーディネートし、協働してクライアントの援助を担っていく場合がある」という視点を提供することが望ましい。また、地域に必要とされるサポートシステムやネットワークの構築、地域の社会的資源の積極的な (一般社団法人日本臨床心理士会 (編), 2009)」と、アウトリーチ教育及び多職種協働のスキル習得の必要性について言及している。今後、さらに需要が高まると予想される領域であり、指定大学院での充実した教育プログラムの展開が求められると考える。

そこで、本研究では、特に医療領域でのアウトリーチに視点を置き、現在の指定大学院における医療領域の学外実習の現状を文献研究を通じて明らかにし、課題を探ることを目的とする

II 方法

文献データベースCiNii-Aericles (国立情報学研究所) を用いて、発行年の制限を設けず「臨床心理士養成大学院」、「心理臨床実習」、「臨床心理実習」をキーワードとして、文献を収集した。得られた文献から、医療領域での学外実習についての記述が見られるものを精査し、該当文献を研究対象とした。

III 結果

文献データベースCiNii-Aericles (国立情報学研究所) を用いて、発行年の制限を設けず「臨床心理士養成大学院」、「心理臨床実習」、「臨床心理実習」をキーワードとして検索を行った (検索実施日: 2017/10/28) 結果、該当する文献は見つからなかった。そこで、キーワードを分けて検索を行うと、「臨床心理士養成大学院」では17文献、「心理臨床実習」では9文献、「臨床心理実習」で

は62文献が該当した。本研究では、指定大学院における学外実習の現状と課題を明らかにし、医療領域のアウトリーチの視点から考察することを

目的としているため、抽出した論文を精査し、研究の趣旨に沿う内容のものに絞り、10文献を取り上げた。論文の概要について表1に示す。

表 1 医療領域の学外実習の記載がある10文献の詳細

研究者 (発表年)	タイトル	出典	対象と方法	研究概要
伊藤直文, 村瀬嘉代子 ら(2001)	心理臨床実 習の現状と 課題	心理臨床学 研究, 19(1), 47-59.	調査1: 330機関 (病院, 自動相談所, 中学校, 福祉施設 等)に勤める臨床心 理士。郵送による アンケート調査。 調査2: 臨床心理 士670人。郵送に よるアンケート調 査。	大学外部機関における心理臨床実務実習の実態と臨床心理士の 考えを把握し、現状分析を行うために、調査1: 330機関への 実習実施実態調査、調査2 都臨床心理士会会員670人への個人 調査。＜調査1＞①最近2年間の実習受け入れ経験率は約25%。 ②臨床心理士の一人職場が38%。実習受け入れ環境の厳しさが うかがわれた。③受け入れ経験のない機関の74%が、実習に 「関心がない」「考えたことがない」。他職種と協同している職 場と他職種のいない職場別では、「関心あり」の割合は、他職 種のいる職場の方が有意に高値。＜調査2＞①受け入れた実習 生は、学部生が6割弱で院生よりも多い。②実習受け入れ経験 のある群は「クライアントにも有意義」など実習のプラス面を 多く挙げ、経験のない群は、マイナス面を挙げる傾向。
小山 充 道 (2003)	「臨床心理実 習」の実際	信州心理臨 床紀要, 2, 45-56.	北米大学院におけ るカウンセラー養 成のための臨床心 理実習と、信州大 学院臨床心理学コー スの臨床心理実習 の実例報告。	充実した臨床心理実習プログラムをもつ北米大学院での実習例 を取り上げた。実習は半期科目として設定され、週4.5時間、 個人SVを週1時間、グループSVを週3時間受講。インターン (外部実習)で600時間課される。臨床領域が明確化され、メン タルヘルスカウンセラーは主に薬物乱用者を対象としたカ운 セリング学習を深め、リハビリテーションカウンセラーは事故 や病気により脳障害を患った人を対象としたカウンセリングを 学ぶ。信州大学大学院では3週間医療領域の学外実習を実施。 カンファレンス参加、診察陪席、病棟実習、心理検査の実施等。
松 原 由 枝 (2004)	臨床心理学 実習が学生 に及ぼした 成長要因	川村学園女 子大学研究 紀要, 15(1), 43-54.	学部心理学科4年 次通年科目である 「病院・施設等実習」 受講生34名の、実 習後の発表資料を もとに考察。	「病院・施設等実習」における学生の実習についての発表資料 を基に、学生の成長要因を、知識的成長要因、社会的成長要因、 臨床感性的成長要因、心理的成長要因の4つに分類。本研究か ら学生は実習を契機に様々な成長を遂げたと言えるが、それも 各実習先、各臨床現場の方々の尽力があつてこそであり、今後 も大学と現場の連携により実習には様々な工夫が必要と言える。

金 坂 弥 起 (2006)	精神科病院 における臨 床心理実習 についての一試論	臨床心理学, 6(5), 645- 650.	勤務する単科精神 科における臨床心 理と実習生受け入 れの体験例報告。 実習生2名の実習 計画書と実習報告 書を基に考察。	精神科患者に対する漠然とした不安を, ある程度は克服, ない しは軽減した上で長期的な実習に臨んでほしいため, 修士1年 生で短期間の体験実習。2名の実習計画書と実習報告書を基に, 体験の実際を報告した。実習生の初々しい体験の片鱗が読み取 ることができるとともに, 社交辞令以上のものが間違いなくあ る。実習は, 何をどこまでという到達点の設定が困難なことも あり, まちまちに行われざるを得ない。依頼する大学院側と依 頼される現場の双方がいっそう議論を進めていく必要がある。
藤 沢 敏 幸 (2007)	大学院にお ける心理臨 床教育・訓 練に関する 一考察	心理教育相 談研究, 6, 11-22.	大学院2年次に実 施している長期の 病院心理検査実習 体験の報告と, 24 名の実習生が実習 体験をどの様に評 価しているかアン ケート調査。	当大学内には心理臨床訓練施設として心理教育相談室が設置さ れている。しかし, 全体的な受付件数の少なさや担当ケース数 の少なさ, 対象となる問題が子どもの問題がほとんどであるこ となど, 訓練としては幅の狭いものになりがちである。そこで, 当大学院としては, 1年次や2年次に実施している臨床心理基 礎実習・臨床心理実習を学外研修の重要なものとして位置づけ て訓練に当たってきた。特に2年目に実施している長期間にわた る心理検査実習は, きわめて教育・訓練効果の高いもので, 学生にも好評である。
岩橋知子・ 友清由希子 (2008)	大学院にお ける心理臨 床教育・訓 練に関する 一考察	心理教育相 談研究, 6, 11-22.	大学院2年次に実 施している長期の 病院心理検査実習 体験の報告と, 24 名の実習生が実習 体験をどの様に評 価しているかアン ケート調査。	当大学内には心理臨床訓練施設として心理教育相談室が設置さ れている。しかし, 全体的な受付件数の少なさや担当ケース数 の少なさ, 対象となる問題が子どもの問題がほとんどであるこ となど, 訓練としては幅の狭いものになりがちである。そこで, 当大学院としては, 1年次や2年次に実施している臨床心理基 礎実習・臨床心理実習を学外研修の重要なものとして位置づけ て訓練に当たってきた。特に2年目に実施している長期間にわた る心理検査実習は, きわめて教育・訓練効果の高いもので, 学生にも好評である。
岩橋知子・ 友清由希子 (2008)	学外医療領 域における 臨床心理実 習の学びに ついての質 的研究	福岡教育大 学心理教育 相談研究, 12, 33-40.	医療機関で実習を 行った大学院修士 課程の学生1~2年 生9名に対して半 構造化面接による インタビュー調査 を実施。逐語録か ら, KJ法で分析	臨床心理士を目指す大学院生が, 学外の医療領域における臨床 心理実習で何を学び, どのような体験をしているのかについて 面接調査を実施し分析を行った。その結果, 主に「能動的活動 によって得られた臨床心理実習の実際」, また実習における様々 な「場の認識」, また「クライアントの内面に向き合う」こと で受動的に得られた体験や, それにより「自己の内面, 自己の 課題の明確化」に至る体験をしていることが明らかになった。

田島佐登史 (2008)	臨床心理士養成して言え大学院の院生が考える終了後に役立つ学習と体験	目白大学心理学研究, 4,35-48.	心理系大学院1年生29名, 2年生29名, 計58名を対象に, 質問紙調査を実施。選択式8項目, 自由記述式6項目。	臨床心理学専攻修士課程に在籍する大学院生58名を対象として, 大学および大学院での学習や体験のうち, 修了後に役立つと思う学習や体験について質問紙による調査を行った。その結果, 《演習や実習の体験》, 《ケース検討》, 《専門家としての社会性の獲得》, 《心理学の知識やスキルの修得》, 《日常生活から得られる経験・体験・知識》の5つに分類された。「システムオーガニゼーションの技能」と「研究活動のための知識や技能」は, 含まれていなかった。この相違には, 心理臨床活動を社会に位置付けていくために必要な臨床心理学の専門活動に関する意識の弱さが関係している可能性が示唆された。
良原誠崇, 落合美貴子 ら(2010)	臨床心理実習の実態と	心理臨床学研究, 28(5), 595-606.	臨床心理士養成大学院159校, 臨床心理士(大学教員は除く)1000名を対象に, 郵送によるアンケート。	臨床心理士養成大学院(n=69)と臨床心理士(n=324)を対象にした質問紙調査。①大学院では, 実習環境が以前より充実化していることがうかがえたが, 学内ないし学外いずれかで実習評価を客観化している大学は29%。②現場の臨床心理士は, 38%が実習を受け入れており, 受け入れていない群と比較して, 実習のプラス面を認識していたが, 実習の必要性については, 過去の調査よりも低い評価。③実習の効果を促進する要因については, 大学院, 臨床心理士ともに臨床心理学に関する基礎知識の教育を重視。④大学院は, 実習環境の整備を重視し, 経験年数が10年未満の臨床心理士は, 精神病理に対する理解や, 実習における客観的な評価基準があること, 10年以上の臨床心理士は, 大学院における実習システムの整備が重要であるという認識の違いが明らかになった。
松井三枝 (2012)	臨床心理専門家養成のための医療実習に関する実態調査 : 全国臨床心理士指定校におけるシラバスより	富山大学杉谷キャンパス一般教育, 40, 111-114.	指定校165校を対象に, WEB上で掲載されているシラバスに基づいて, 医療実習の有無, 実習内容等について調査。	165の臨床心理士指定校のうち, 何らかの形で医療実習を多少なりとも取り入れている大学院は80校と, 半数に満たなかった。実習先をみると, 大学附属病院は8校であり, 心理職に関しての教育のための連携はまだ全国的に認識されておらず, 我が国の臨床心理教育における医療実習の不足が予測される。また, 実習先は精神科が比較的多いが, 心療内科, 神経内科, 脳神経外科, 小児科等, 他科での実習体験も構成されてゆくと好ましい。

牧 剛 史 (2014)	臨床心理士 養成プログラ ムにおける実 践知の重要 性	佛教大学教 育学部論集, 25, 25-34.	佛教大学大学院に おける臨床心理 士養成プログラム (講義, 実習)から, 実践知の重要性を 考察。	佛教大学大学院臨床心理学専攻では, 特に「臨床心理実習」を重視したカリキュラムを用意している。この実習には, 学外機関での実習とグループSV, 附属相談室での事例担当と個人SVおよびケースカンファレンスが含まれる。臨床心理士の養成においては, 自分自身の実践について省察する「行為についての省察」だけではなく, 臨床実践中に何を感じていたかという「行為の中の省察」が重要である。「臨床心理実習」を通して学ぶのは「実践のマニュアル」ではなく, 「個別的・具体的な実践知」であると言えよう。
-----------------	---	-------------------------------	---	---

IV 考察

1. 医療領域における学外実習の現状

論文の精査をする中で、大学院附属の心理相談室における学内実習についての報告や調査研究は多いものの、学外実習についての論文は希少であることが分かった。比較的研究が進んでいる学内実習についても、課題が多く挙げられており、小林ら（2013）は、大学院附属心理相談室において、ここ数年来談者は減少傾向であり、院生に一定のケース数を確保し続ける必要性があるため、相談室の運営のあり方や教育方法について積極的に情報交換をするなど、他の指定大学院及び附属心理相談室との連携のしかたを模索する必要性について言及している。また、金沢（2015）の調査では、大学院附属心理相談室におけるスーパービジョンについて、90%を超える施設で個人スーパービジョンが行われており、週1回1時間というパターンが一般的であること、スーパーバイズの質と時間を確保するため、専任教員が負担を抱え努力していることが明らかとなっている。

学外実習へ目を向けると、本研究から、指定大学院では教育・医療・福祉領域等における心理臨床能力の獲得のため、主に大学院2年次を対象として複数の領域での学外実習のプログラムを提供していることが分かった。特に、医療領域は小山（2003）が、「大学院在学中に医療臨床体験は必須である。臨床心理士の仕事は、歴史的にも精神

科医療と関連が深い」と述べているように、臨床心理士養成プログラムにおいて欠かせない体験であると考えられる。しかしながら、松井（2012）の調査では、指定大学院165校のうち、医療領域の学外実習「あり」が80校、「なし」は22校、63校は公開されているシラバスに記載がなく不明という結果であった。また、各大学で提供している実習時間はまちまちであり、1コマのみ、5コマ程度といった大学もあれば通年で週1回の大学もあった。この結果について、松井（2012）は、我が国の現状ではほとんどの臨床心理系の大学院は教育学部や文学部系列内にあり、スクールカウンセラー養成のための実習は行われているが、実習先の不足や心理職養成のための連携がまだ全国的に認識されていないことを原因として挙げ、医療現場からの心理職の必要性は十分認識されている一方で、医療実習の不足が懸念されると述べている。また、岩橋・友清（2008）は、医療機関で実習を行った大学院生を対象とした調査から、学内実習に比べ、医療領域における実習では、対象者の年齢が小児から老人までと幅広く、年齢層のみならず、対象者の疾患の種類についても広範囲であることから、学びが多様になることを明らかにしている。さらに、田島（2008）の調査では、大学院生が修了後に役立つと考えている学習や体験の内容について、〈外部実習およびボランティア活動の体験〉を含む「演習や実習の体験」

に関する項目が最も回答数が多く、その理由として、「今までに実際に接したことのない対象者と直接話したり、かかわったりできること」、「実際に援助を必要とする方々と接することができ、そのような方々について、少しではあるが理解を深めることができたと思う」と回答を得ている。田島（2008）は、学外実習について、「外部の実習を経験することにより、臨床現場における厳しい状況や心理援助職の専門性についての理解につながり、他職種との連携の重要性を認識することができる」と考察している。他職種との連携・協働については、中村ら（2012）がそれぞれの概念を整理し、心理臨床領域においてクライアントの存在を前提とした他職種との連携・協働の重要性について言及している。受け入れ側のマンパワーの限界や、「何をどこまで、という到達点の設定が困難なこともあって、まちまちに行われざるを得ない（金坂、2006）」実習状況ではあるが、実習生が学びと成長（「知識的成長・社会的成長・臨床感性的成長・心理的成長（松原、2004）」）を得る体験は、臨床心理士養成のためのプログラムには欠かせないものであろう。

2. 医療領域のアウトリーチの視点から見た課題と展望

本研究で対象とした医療領域の学外実習についての文献から、精神科、小児科、老年期病棟、リハビリテーション施設など、様々な現場で実習が行われていることが分かったが、アウトリーチの実習についての記載は見つからなかった。斎藤（2017）は、日本でも「今後地域移行が進むにつれて、ACTに限らずアウトリーチ型の支援の重要性は高まることが予想される」と述べており、心理職の国家資格化を受け、心理職の職域もアウトリーチへ展開していく可能性が高い。医療領域における心理職のアウトリーチについての研究はまだまだ進んでいないが、実際にアウトリーチで心理臨床を行っている原田（2012）は、「私も他

の職種の人と同じように、訪問をして掃除をしたり、一緒に買い物に行ったり、服薬ができていのかどうかの確認をしたりもする」と述べ、「臨床心理士が訪問するというのは他の職種の訪問とどう違うのだろうか」と検討を試みたことがあったが、なかなか明確な違いを論ずることはできなかった」と、論点を挙げている。また、田中・秦（2011）は、「実際の支援過程においては、心理的な問題よりも日常生活の困難さなど、眼前の問題への対応が優先されることが多かった」と報告しており、臨床心理士としての専門性と生活支援の中で自己の職業アイデンティティが揺らいだ経験を報告している。初瀬（2016）の調査では、精神障害を持つ当事者とその家族が日常生活で困難を感じていることとして、「部屋の掃除」が50.4%と、最も多数の回答を得ている。このような、アウトリーチで欠かせない日常生活支援について、原田・上野（2009）は、「こうした実際的な援助は、本来の臨床心理士の仕事とは違うと言う人もいるだろうが、小さな援助で生活を支えていける意味は大きいと考えている」と述べ、「一緒にテレビを見たり、近所に新しくできたスーパーの話をしたりという支援らしくない支援（ある意味、臨床心理士らしい支援：他の職種の人もするだろうが）もしている」と、日常生活支援の中にも臨床心理士らしい支援は見出せることを日々の訪問支援から感じ取っていた。また、「掃除とかでなくて何もしないおしゃべりするだけの訪問をしてほしい」と、心理職スタッフに対する思いを語った利用者の声も報告されている（原田・上野、2009）。高木（2011）が、「臨床心理もACTING OUT（外向きに活動する）しよう」と、これまで面接室や二者関係の非日常的な場で力を発揮することが多かった臨床心理の世界に、大きな転換が図られるべき時が来ていると述べているように、心理職の活動の場は、面接室のような屋内から地域へ広がり、多職種チームの中で協働できるスキルが求められている。

M.Corey&G.Corey (2004) は、修了生のほとんどが、就職後もっと多くの実習を経験したかったと述べたことを報告している。実習は、理論と実践をつなぐ架け橋となる。医療領域における実習の充実に加え、多職種協働およびアウトリーチにおける心理臨床の理解と体験の場の確保を目指した実習プログラムの構築が求められるのではないかと考える。

引用・参考文献

- 藤沢敏幸 (2007). 大学院における心理臨床教育・訓練に関する一考察 (3). 心理教育相談研究6, 11-22.
- 原田徹・上野光歩 (2009). 精神科診療所における臨床心理士の「訪問」について. 病院・地域精神医学52(1), 30-31.
- 原田徹 (2012). 臨床心理士のための精神科領域における心理臨床, 一般社団法人日本臨床心理士会(監), 同第1期医療保険領域委員会(編), 第2章 精神科領域における臨床心理士の現状と課題ー(1)精神科診療所の立場から, 54-63.
- 一般社団法人日本臨床心理士会(編) (2009). 臨床心理士の基礎研修ーファーストステップ・ガイダンス, 創元社.
- 伊藤直文・村瀬嘉代子・塚崎百合子・片岡玲子・奥村茉莉子・佐保紀子・吉野美代 (2001). 心理臨床実習の現状と課題ー学外臨床実習に関する現状調査. 心理臨床学研究19 (1), 47-59.
- 岩橋知子・友清由希子 (2008). 学外医療領域における臨床心理実習の学びについての質的研究. 福岡教育大学心理教育相談研究12, 33-40.
- 金沢吉展 (2015). 臨床心理士養成のための大学院附属実習施設におけるスーパービジョンに関する調査. 心理臨床学研究33 (5), 525-530.
- 金坂弥起 (2006). 精神科病院における臨床心理実習についての一試論. 臨床心理学6 (5), 645-650.
- 小林佐知子, 福本理英, 松井宏樹, 岩井志保, 菅野真智子, 小牧愛, 浅井茉裕, 松本真理子, 森田美弥子 (2013). 臨床心理養成大学院附属心理相談室における養成教育の現状と課題. 心理臨床学研究31 (1), 152-157.
- 公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会 (2016). 臨床心理士報27(2).
- 公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会ウェブサイト (2018). 臨床心理士とは. <http://fjcbcp.or.jp/rinshou/about-2/>
- 厚生労働省 (2011). 精神障害者の地域移行についてー3. 精神障害者とアウトリーチ推進事業とは. <http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/service/chiiki.html>
- 小山充道 (2003). 「臨床心理実習」の実際. 信州心理臨床紀要2, 45-56.
- 牧剛史 (2014). 臨床心理士養成プログラムにおける実践知の重要性. 佛教大学教育学部論集25, 25-34.
- 松原由枝 (2004). 臨床心理学実習が学生に及ぼした成長要因. 川村学園女子大学研究紀要15, 43-54.
- 松井三枝 (2012). 臨床心理専門家養成のための医療実習に関する実態調査ー全国臨床心理士指定校におけるシラバスより. 富山大学杉谷キャンパス一般教育40, 111-114.
- M.Corey&G.Corey (2004). 心理援助の専門職になるためにー臨床心理士・カウンセラー・PSWを目指す人の基本テキスト. 下山晴彦(監), 金剛出版.
- 中村誠文・岡田明日香・藤田千鶴子 (2012). 「連携」と「協働」の概念に関する研究の概観ー概念整理と心理臨床領域における今後の課題ー. 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要7, 3-13.
- 仲沙織 (2015). 「包括型地域生活支援プログラム」従事者が心理職に求めることーあるチームの半構造化面接からー. 福岡大学院論集47(1), 33-51.
- 仲沙織 (2016a). 「包括型地域生活支援プログラム」のスタッフが心理職に求めることー質問紙調査を用いてー. 病院・地域精神医学58(3), 277-285.
- 仲沙織 (2016b). アウトリーチサービス利用者のニーズから見た心理職の可能性の検討. 日本保健福祉学会誌23(1), 65-72.
- 斎藤環 (2017). アウトリーチとオープンダイアローグー特集 精神科領域におけるアウトリーチ支援の現在ー. 臨床精神医学46(2), 207-212.
- 高木俊介 (2011). ACTING OUTのすすめ?? 地域移行という大転換の中で, 臨床心理に何が望まれるのか. 【特集】精神医療における臨床心理. 精神医療61, 43-48.
- 田中聡子・秦基子 (2011). 精神科アウトリーチサービスにおける心理療士士の役割ー超職種チームにおいて期待される役割とはー. 鳥取臨床科学4(2), 165-171.
- (公)日本臨床心理士資格認定協会 (2016). 新・臨床心理士になるために [平成26年版]. 誠信書房.
- 田島佐登史 (2008). 臨床心理士養成指定大学院の院生が考える修了後に役立つ学習と体験. 目白大学心理学研究4, 35-48.
- 良原誠崇・落合美貴子・金坂弥起・松木繁・山中寛 (2010). 臨床心理実習の実態と実習効果の促進に関する一考察ー大学院と臨床心理士のアンケート調査から. 心理臨床学研究28 (5), 595-606.

Off-campus training in graduate schools of clinical psychology: From the perspective of outreach in medical fields

NAKA Saori

Mental care provided by specialists has become increasingly necessary in recent years, and demand for psychologists' outreach in medical fields is increasing. A literature review was conducted to investigate the state of off-campus practical training at graduate schools of clinical psychology from the perspective of outreach in medical fields, as well as to explore related problems. There have been fewer studies on off-campus training, compared to research on on-campus training. Therefore, this study reviewed only 10 articles. A national scale survey on graduate schools of clinical psychology indicated that sufficient off-campus training in medical fields had not been provided, compared to that in educational fields. On the other hand, after completing the course trainees evaluated off-campus training as the most useful experience of their career. Off-campus training is considered indispensable for psychologists' training programs. Various such training programs have been developed not only in psychiatry but also in pediatrics and rehabilitation fields. However, there are no reports on outreach. It is predicted that outreach-type support would be increasingly required as the transition to local communities advance in the future. Considering that national qualification for psychologists has been implemented, psychologists' occupational fields would expand to outreach services. Then, they would require skills for working cooperatively with an inter-professional team. Practical training bridges theory and practice. It is considered important to develop training programs aiming to develop an understanding of clinical psychology and experience its practical use in inter-professional work and outreach activities in addition to improving practical training in medical fields.

KeyWords: clinical psychology training, clinical psychological community support, outreach, inter-professional collaboration